

異色の才人 (住田正一の想い出集より)

帝人株式会社 社長

大屋 晋 三



住田正一君と私とは、神戸の鈴木商店に大正七年に一緒に入社しているので、同期生の間柄である。

鈴木商店は、実業界の不世出の偉人金子直吉さんが、第一次世界大戦の風雲に際して、大胆不敵きわまりない積極政策をとって、戦争景気に乗じて大きく発展させたものである。

それまでは神戸の一中貿易商にすぎなかったものが、一躍して三井、三菱と肩を並べて、日本の財界を三分するまでになったのであった。急に膨脹しただけに、天下に人材を求めることが急で、私たちが入社した大正七年などは、鈴木商店始まって以来の多数の学卒者が、ここに入社したのであった。

その集まった多くの人材のなかで、住田君はなんといっても図抜けた異色の存在であった。というのは、われわれ一般の新入社員よりはだいぶ大人びていて、いうことなすことが垢抜けしていた。社に入った当座というものは、誰でも上役の前に出ると、とかくはにかんだり、引込みがちになったりするものだが、その点住田君はおめざ臆せず、先輩に対しても少しも遠慮はせず、場合によればこれをやっつけて憚らぬことさえあった。

いまでもよく憶えているが、彼はある時など、自分が配属されてい

る船舶部の主任荒木忠雄さんを差しおいて、副支配人の永井幸太郎さん(後の日商社長) に対して、まるで食ってかかるような調子で大議論を吹っかけていたことがある。何が理由かは知らぬが、その鼻柱の強いには一驚を喫したものであった。

なお、私が同君から受けた第一印象は、何を聞いても才人ということであった。早くから会社の総師金子さんの知遇を受け、その口述を受けて経済夜話を書いたこともある。また船舶事務を学問的に研究して、船荷証券論や船舶論を雑誌に発表したりするなど、何かにつけてわれわれよりも知恵が一步先立っていた。

その反面、一つの事業なり商売なりにじっくり取組むという、本当の事業家なり商人とはその肌合いが違っていた。果せるかな、彼の後年の経歴は一つの事業に没頭したのではなく、多くの仕事に幅広く関係している。

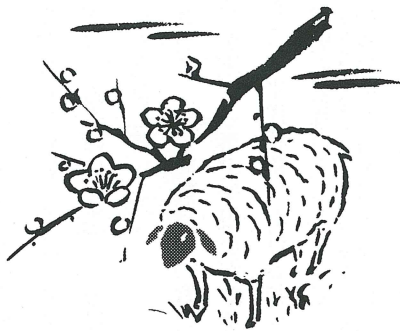
そして、何でも手際よく処理して、何をやらせてもこれを適当にこなすという才人肌を遺憾なく発揮したのであった。

住田君と私との交遊は、私が鈴木から帝人に移り、彼も鈴木破綻後いろいろの仕事をしてきたことから、その間に二十余年もほぼ途絶えていたことがあった。

それが戦後、彼は東京都の副知事になり、私も政界に出たりしたので、また親しくつきあうようになった。ことに同君が辰巳会の世話人を引き受けて、四散しかけていた鈴木商店の関係者を結集するようになってからは、その関係はさらに密接になった。特に播磨造船が石川島重工に合併される数年前から、彼が北村徳太郎、六岡周三、竹田儀一の諸君や私などの間を奔走して、鈴木旧勢力を糾合して何か実業界に役立たせようと、会合の幹事役をしたり、いろいろ骨折ったりし

てくれたので、腹を割った交際もするようになった。

それやこれやで、住田君と私との交際は、中断はあったとはいっても、五十年の長きにわたっている。単に同期生で、しかも才人として異色な存在であったというだけでなく、良い友人の一人として長く忘れられぬ人物である。



その時 歴史が動いた

巨大商社鈴木商店の栄光と挫折

— 担当ディレクターの取材ノート —

NHK 大阪放送局文化部

藤 波 重 成

その後の鈴木商店

神戸と聞いて、多くの人がエキゾチックな港町を想像するのではないだろうか。関東生まれの私などは憧れに近い気持ちを抱いている。大正時代、はるか遠く欧州や南洋から来た船員でにぎわう神戸は海外旅行が簡単になった現在よりも数倍、異国情緒あふれる街だったに違いない。その神戸の中心地海岸通りに建つ三階建ての煉瓦づくりのビルが、鈴木商店本店だった。本店前には当時最新の自動車が三台も置かれていたという。

『企業城下町』と言われる街がある。トヨタ自動車のある愛知県豊田市、日立製作所のある茨城県日立市、三菱重工のある少し前の長崎市など、企業と都市が密接に結びついている点が特徴だ。その意味では大正時代の神戸は鈴木商店の城下町と言えなくもない。

インタビューで金子直吉について話をしていた松下さんによると、神戸の繁華街で飲み食いする時、鈴木社員と言えどどこでも『つけ』にできたそう。企業城下町はメーカーがほとんどだが、それは税金に加えて工場などでその土地に就職口を生み出すからだ。社